9

次は、マンガ家である手塚治虫が自分の子どものころをふり返って話した内容の一部です。よく読んで、あとの問いに答えましょう。

ぼくが子供の頃から※1下手の横好きでマンガを描いていたことは、すでに何度もお話ししてきました。小学校のときに落書きみたいなマンガで紙芝居を描いて、学校へ持って行ったり、近所の子供を集めて見せて、説明していたのです。しかし、その前に描いたマンガはまず母に見せたのです。母は見てくれました。ほんとうにうれしかったものです。

ところが三回目か、四回目から見てくれなくなって、「ああ、わかった、わかった」で終わってしまったのです。これはほんとうにショックでした。そういう体験をぼくは持っているので、子供にとって、自分にとって大事件である発見とか発明、あるいは※2創作を親に持って行ったときに、親が通りいっぺんの生返事をしたり、無視したりせず、そこでちょっと励ましてやるとか、かかわってやることが、いかに力添えになるかということをぜひともお話ししておきたいのです。

（手塚治虫『ぼくのマンガ人生』による）

（注）※1「下手の横好き」…上手ではないのに、とても好きなこと。

※2「創作」……自分の考えをもとにして作った作品のこと。

一　――部「通りいっぺんの生返事」という表現は、本文中のどの部分を言いかえたものですか。言いかえた部分を本文中からぬき出して書きましょう。

二　筆者が伝えたかったことをまとめたものとして、もっともふさわしいものを次の**1**から**4**までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

1　子供は、自分にとっての大事件について、親がどう思うかを考えて説明するものだ。

2　子供は、自分が創作したものなどを親よりもまず友達や周りの人に見せたがるものだ。

3　子供は、自分の発見や発明などに対する親の真剣（けん）なかかわりから力を得るものだ。

4　子供は、親の態度を見てから、協力したり言うことを聞いたりしようとするものだ。